

## 新生児医療情報管理とハイリスク新生児を持つ母への心理的援助

(分担研究：ハイリスク児出生の実態把握と追跡管理に関する研究)

側島久典<sup>1)</sup>、永田雅子<sup>2)</sup>

要約：周産期情報ネットワークの整備では、母体搬送が進みつつある中、院外出生病的成熟新生児の救命率の向上のため、これらの緊急搬送システムの充実が望まれる結果となった。一方ハイリスク新生児の退院後に関しては、平成8年度に行った極低出生体重児の家族への子育てアンケート結果と、未熟児訪問看護の現状についてのアンケート調査をもとに母の児に対する心理分析を行い、ハイリスク新生児を持つ家族への取り組みについて更に掘り下げて検討した。入院中からの母子関係を築き上げるため、正常産の母、NICU入院中の母にアンケートおよび心理的なアプローチを試み、今後のNICUで医療スタッフとともに取り組むべき方向性を探った。新生児医療に必要なスタッフの構成を更に幅広い範囲で築いて行く必要があると考えられた。

見出し語：ハイリスク新生児、周産母子センター整備、母子心療科、母親の心理分析

### 研究目的および結果

#### 1. 周産母子センター整備に向けて：現状とその解析

新生児医療情報ネットワークは1981年から愛知県救急情報システムに組み込まれて発足し年月を経ているが、現在は県下各NICUと開業産婦人科との間に直接連絡網を持っている場合が多く、新生児搬送依頼に関しては各NICU間で連携をとりつつ新生児集中治療ベッドに収容している。総合周産期センター開設に向けての周産期医療検討会の設置がなされ活動開始となった。名古屋地区では院外新生児搬送の整備が今後の課題となると考えられ、1996年1年間で、

自施設で収容できず三角搬送または他施設搬送依頼を行った件数は、名古屋地区主要14施設で約200件を数え、これら新生児をさらに円滑に収容する体制づくりが必要と考えられる。母体搬送が定着しつつある中で、成熟新生児の出産周辺の問題から突発的に入院依頼をされるケースの円滑な対応が今後クローズアップされると考えられる。院内出生に対する院外出生児の極低出生体重児での死亡率比は2～3倍にとどまっているものの、出生体重2500g以上の児では25倍以上と極めて高く、地域開業産婦人科との密接な連携を保ち、速やかな新生児搬送ができるセンターの整備が必要と思われる。

1) 名古屋第二赤十字病院小児科, 2) 同臨床心理士

## 2.入院児の母の心理分析

新生児医療体制の整備と共に、母親への支援も極めて重要である。NICUを生存退院した出生体重1500g未満のハイリスク新生児の家族への子育てに関するアンケート調査を平成8年度に行った結果をふまえて、正常成熟新生児の母とNICU入院時へのアンケート調査を試みた。成熟新生児の母については、出産後の母の精神状態と児への愛着の関連を探り、特殊なケースとなるNICU入院児の母との比較が可能かどうか検討した。

### 1) 正常成熟新生児の母への子育て心理アンケート分析

対象は1995年9月から1996年9月までの間に名古屋第二赤十字病院産婦人科病棟で出生した成熟正常新生児532名の母に日齢5～10の間にアンケートを行った。有効回答数は417人(78%)であった。母の平均年齢は29.9歳、児の平均体重は3060g、男女比はほぼ1:1であった。内容は児の受容、児への不安、児とのかかわりに関する質問とした。

その結果母のうつ状態が強いと児への不安が強く、愛着も低い結果を得た。また母の不安は妊娠経過が順調である場合は低く、子育てに関する相談者がいない場合には極めて高い状態となっており、この点からも哺育している母と大部屋にいることは、不安を解消する要素となることが期待できた。さらに児への愛着は、妊娠が判明した時の配偶者の反応が肯定的であるほど強くなる結果となり、父親の出産への関与もその後の育児へむけての母の心理に大きく影響する結果となった。

早期母子接触がより潤滑に行われるよう、このような母の分娩後の心理状態を把握して

おくこともスタッフが母子を支援する上で重要なことである。

### 2) 極低出生体重児の母の心理過程の分析

この結果からも、突然NICUに入院となってしまう極低出生体重児を出産した母には、極めて多大な精神的負荷がかかると考えられる。このような母と家族への取り組みをいかに考えて行くかは、NICUとしては極めて重要な問題である。

1996年1月から1997年7月までの19か月間に出生し、名古屋第二赤十字病院でケアされた19名の超低出生体重児を含む極低出生体重児39名の母36名に対して、カウンセリングを実施した。平均出生体重1298g、入院平均日数は111日で平均カウンセリング開始日数は17日であった。以前に報告し開設した「母子心療科」受診希望者に対してはカルテを作成した。

全員生存退院となり、在宅酸素療法2人、明らかな後障害は現在みられていない。その結果共通した心理過程がみられ、以下の5段階を踏んで行くと考えられる。

1. 出産後の身体的・精神的負担の回復時期。
2. 出産についての罪障感が強く、児を受けとめられない時期。
3. 児への消極的、否定的感情の表明時期。
4. 児の反応、発達を見て肯定的感情が芽生える一方で、否定的読みとりをする時期。
5. 愛着形成時期

前年度行われた極低出生体重児の家族への子育てアンケートでは、退院後1年は神経学的発育に関心とくに脳性マヒへの不安が大きく、相談を求める対象として夫を筆頭に、児の年齢とともに医師、地域保健婦のかかわりが大きくなっている結果を得た。このような不安をスムーズに受け入れ、解決してゆ

く1方法として、入院早期から医療スタッフとともに、専属スタッフからのカウンセリングも極めて大きな力となると考えられた。

#### 文献

永田雅子、永井幸代、側島久典、齋藤久子

NICU入院児の母親への心理的アプローチ

—極低出生体重児の母親の心理過程—

小児の精神と神経 37 (3) 197-202



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:周産期情報ネットワークの整備では、母体搬送が進みつつある中、院外出生病的成熟新生児の救命率の向上のため、これらの緊急搬送システムの充実が望まれる結果となった。一方ハイリスク新生児の退院後に関しては、平成8年度に行った極低出生体重児の家族への子育てアンケート結果と、未熟児訪問看護の現状についてのアンケート調査をもとに母の児に対する心理分析を行い、ハイリスク新生児を持つ家族への取り組みについて更に掘り下げて検討した。入院中がらの母子関係を築き上げるため、正常産の母、NICU入院中の母にアンケートおよび心理的なアプローチを試み、今後のNICUで医療スタッフとともに取り組むべき方向性を探った。新生児医療に必要なスタッフの構成を更に幅広い範囲で築いて行く必要があると考えられた。